



擦文土器

湧別町川西遺跡出土

高さ38.5cm 口径32.0cm

北方民族博物館だより
—第40号—

第15回北方民族文化シンポジウム	2
事業報告 北方文化セミナー	5
講習会「ウィルタの手袋“マンバッカ”づくり」	6
事業報告 ロビーコンサート2000	
お知らせ・表紙・記事	7
ニュース	8

「北方諸民族文化のなかのアイヌ文化 —儀礼・信仰・芸能をめぐって—」

平成12年10月26日(木)・27日(金) 於網走セントラルホテル

第15回北方民族文化シンポジウムは「北方諸民族文化のなかのアイヌ文化—儀礼・信仰・芸能をめぐって—」をテーマに開催いたしました。昨年度に引き続き、北方におけるアイヌ文化の位置づけをさぐるメインテーマのなかで、動物送り儀礼や信仰、芸能についての発表と議論を通じ、各地域の信仰や芸能のあり方における共通性を検討し、文化交流や伝播並びに環境に対する適応をあきらかにすることが、今回の目的です。ロシアから3名、日本から6名の発表者を迎え、北海道、サハリン、アムール川流域・沿海地域、カムチャツカ半島の先住民文化の発表と議論がおこなわれました。以下にその概要を報告します。



第1部「芸能」

座長：大島 稔（小樽商科大学）

■甲地 利恵

（北海道立アイヌ民族文化研究センター）

「北方諸民族の音楽における声のいろいろ—アイヌ音楽を中心に—」

ここで用いる「音楽」とは一般的な音楽の意味だけではなく、唱えごとなど、あるいは物語として認識されるような語り物も音楽として捉え、「声の音楽」は人間の声を用いておこなうあらゆる音楽的行為をここでは意味している。



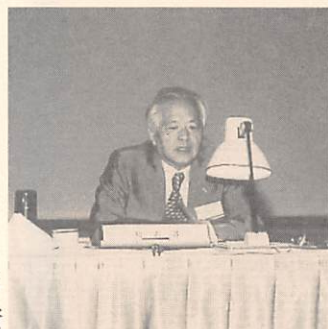
アイヌ音楽では音の高低だけではなく、声の出方そのものが、旋律の重要な要素となっている。低音域で喉の奥の方から出す声（^{うな}唸るような声）、反対に高音域の軽い声（^{こが}いわゆる裏声）、呼気、吸気、舌や口蓋垂を細かく振動させる音（いわゆる巻き舌など）、各種動物のリアルな鳴き真似など、声の高さと相関する声区、あるいはテクニカルな面およびジャンルによる区分に分類される。これら暫定的区分から周辺諸民族の声の音楽との比較検討が可能ではないか。

■谷本 一之

（北海道立アイヌ民族文化研究センター）

「アイヌとコリヤクに共通する芸能の要素—Vyy'enkaからの報告」

ロシア・カムチャツカ州のヴイヴェンカ（Vyy'enka）で実施したコリヤークを対象とした調査からアイヌと共通する要素を抜き出し検討を加えたい。特定の個人に帰属する歌はコリヤークでは他の拡大家族と自らの拡大家族を区別する機能をもって伝承され、アイヌではサハリンにこの要素がみられる。また、コリヤークのホロロ祭り（海獣送り儀礼）で行われる一種の綱引きは、最終的に綱が切れることに呪術的意味があり、アイヌのクマ送り儀礼における綱引きと対比される要素ではないか。



* 甲地・谷本両氏は音声資料、映像資料により具体的な事例を提示された。

第2部「口承伝承と精神世界」

座長：岡田 淳子（北海道東海大学）

■荻原 眞子（千葉大学）

「『呪的逃走』—アイヌと北方諸民族、特にコリヤークの説話について—」

アイヌに「ペナンペ・パナンペ」という一連の

説話がある。「川上の者・川下の者」と訳され、川上の者ペナンベが物事をうまくやって豊かにくらしていることを知った川下の者パナンベが真似をするが、うまくゆかず、散々な目に遭う話である。この説話には日本の昔話には稀なモチーフ、特異なモチーフがある。その一例である「呪的逃走」は物を背後に投げるとそれが障害物に変化し、その間に追っ手から逃げるというモチーフで、アイヌの口承文芸のほかのジャンルにおいても特徴的であり、近接する北方諸民族の口承文芸とも共通する要素である。



■ハン・ベラ・イノケンティエヴナ（カムチャツカ州カブラン村）

「イテリメンの精神生活—物語の英雄オオガラスと文学・文芸の創造」

イテリメンには、独自の信仰があり、その信仰を木製の守り神、ハンタイ（聖木）、アジュシャック（木偶）に表している。イテリメンは、自分達の起源を始祖神であるクトッフ（オオガラス）と考えている。昔話に表現されているクトッフの性格は、物語によって異なる。一方では、働き者で、やさしい夫であり父であり、また、狩猟にも漁撈にもたけていると述べる物語もある反面、他人をだまし、怠け者で、残虐であると描写されるものもある。クトッフの妻のミテは、子どもも親も親類も多い大家族の中で、怠け者の夫を持つ妻として描写されているが、物語によっては怠け者の、人をだます性格の、美しい女性として描かれている。1960年代から80年代にかけてイテリメン文化存亡の危機意識から、このようなイテリメンの伝統的文化を掘り起こし、さらに伝統に基づいた新しい創作活動を行う芸術家が輩出した。



■萩中 美枝（アイヌ口承文芸研究者）

「アイヌの口承文芸—語り手たちの意識の推移—」
英雄叙事詩は男が語るものだと思われていた。

樺太の英雄叙事詩は仰臥して語る。北海道でもかつてはそうようにしていたらしい。一晩で終らない長編ものが珍しくなかった時代である。坐りっぱなしで語り続けるのは容易なことではなかろう。

最近の辞書に、英雄叙事詩のヒーローの名がポイヤウンベであるかのような記述が見られるが、それはボンシヌタブカウクル（若いシヌタブカびと）の渾名で、語りの中で敵が蔑称として用いたのが事の起こりだと伝えられている。1960年代ウパニパクテとして早口を競う歌を何度も聞いたが、同じ地域でも、呼称法や歌に対する意識が違っている。サコロベとして語っていた同一人物も1960年半ばでユーカラと呼ぶようになった。金田一京助がオイナと呼んだジャンルは人間の始祖神の物語だが、国造りの神や、人間に文化を教えた神の物語などを含むこともある。だがオイナといえど別の意味になる地域も多い。



文字で表されたものを読むときと、テープに吹き込まれたものを聞くとき、語り手にじかにふれるときでは受取り方に差違がある。時代が動き、世態も世代も変われば伝承自身の考え方にも変化がおきる。

第3部「儀礼」

■大島 稔（小樽商科大学言語センター）

「カムチャツカ先住民（コリヤーク）の動物送り儀礼」

カムチャツカ先住民コリヤークは自然の恵みを長い間利用してきた人びとである。しかし、厳しい自然の中で生きる彼らには、常に飢餓への不安がある。その不安は生きている間だけの不安ではなく、死んだ後にも連続するものと考えている。その為彼らは、自然界のあらゆるものに魂が宿り、人間の靈魂同様に不滅で、再び人間世界に戻ってくるというアニミズムを信仰の基礎にしている。そして人間の世界に再び戻ってくることを確実にするために、狩猟対象獣を丁重に迎えて送り返す儀礼を行う。



送り儀礼には、狩猟シーズン前儀礼、狩猟直後の儀礼、狩猟シーズン後の儀礼がある。対象となる動物はアザラシ、クマ、トナカイなどの海獣類、陸獣類である。

また、彼らは人間と動物の魂は同等で互いに入れ替わることができると考えており、そのためトナカイ、クマ、オオカミ、オオガラスを自分たちの祖先としてあつかうトーテミズム信仰を持っている。

コリヤークにおける動物儀礼は、厳しくも豊かな自然環境での生業活動において、人間の力では解決できない問題を解決するために必要な精神的な生業活動である。

■ハライモヴァ・クラウディア・ニコライェヴァ (コリヤーク自治管区教育研究所)

「イテリメンの宗教と信仰」

イテリメンは、1970年代に教化されて以来、キリスト教徒であるといわれる。しかし、彼らの本来の宗教は、万物に不滅の聖霊や靈魂があると信じるアミニズムである。

例えば、彼らは神々への尊敬の念を示すために、ツンドラの平地に聖木を立て、行き交うたびに聖なる草（ハマニンニク）や魚などの食物を捧げる。また、川でおぼれている人や山で雪崩にあう人を助けることはタブーである。なぜなら、これらの人びとを助けるということは、水の霊や山の霊の食べ物を奪うことにつながるからである。



温泉、火山、森などは悪霊によって作り出されたもので、さまざまな悪霊が住むとされる。その為、彼らはそれらの場所へ容易に近づこうとはしない。イテリメンは聖霊より悪霊をおそれるため、悪霊をよりあがめる。

また、イテリメンには人間と動物の魂は同等で互いに入れ替わることができるとするトーテミズム信仰がある。イテリメンの最高神はオオガラス（クトゥフ kutkh）であるとされる。オオガラスはイテリメンの最初の祖先であり、イテリメン統合の象徴であると同時に、アジアの他民族との古い親縁関係を示す象徴でもある。

■ベレズニツキー・セルゲイ（極東歴史学・考古学・民族学研究所）

「アムール川流域先住民の儀礼と芸能」

アムール川流域の先住民であるウリチ、オロチ、ナーナイは、人は不滅の魂を持ち、死後輪廻転生し、親族の一人にその魂が宿ると考えられている。また、魂があの世界へ行くのは死後しばらくしてからであり、それまでは墓の上に立てられた墓標に宿ると言われる。葬儀に関するこのような考え方や形態は、サハリンのニブフやアイヌ、日本、中国、朝鮮など広く東アジアに共通する側面がある。

墓の上の、木製で、人をかたどった彫刻が施されている墓標は、故人の魂の入れ物であり、遺族はこの墓標を通じて故人と交流すると考えられている。例えば、葬儀や供養の際、この墓標に穴をあけ、パイプを通し、故人にタバコを振る舞うことは、サハリンのニブフなどに共通し、また、その墓標の形や大きさ、表面に施される彫刻は、広く東アジアに類似している。



彼らアムール川流域の先住民に、いつ墓の上に墓標を立てる習わしが生まれたのか、何故、彫刻を施すのか、またどのようにしてその習慣が伝播していったのかは定かではない。古代より盛んであった中国や朝鮮、あるいは日本や北海道アイヌとの交流の中で広がっていったものではないかと現在のところ考えられている。

（学芸課 渡部 裕／角 達之助）

蝦夷地の社会と文化
—中世アイヌ社会から場所請負期まで—講師 田端 宏氏（道都大学）
小林 真人氏（北海道開拓記念館）

平成12年10月21日（土）13：30－16：00 当館講堂

二人の先生をお招きして、文献史学の立場からアイヌの歴史・文化について講演していただきました。以下に各講演の要旨を紹介します。

■小林 真人（北海道開拓記念館）

「アイヌ社会と鎖国—シャクシャインの戦いの意義について—」

近世の北海道については、文献資料が少ないため未だ知られていないことが多い。中でも、アイヌについては近代に入ってから差別的意識が先行して誤解されていることが多い。

例えば、「アイヌ勘定」という言葉は、和人がアイヌをたぶらかして不当に利益を搾取するための勘定法だとされる。これはアイヌに計算能力がなかったとする見方から生まれた言葉であるが、交易の民であるアイヌは、複雑な数を計算する能力を持っており、このような事実はない。アイヌ勘定は、近代になって作られた差別的解釈である。また、アイヌの漁具には川でサケを捕るための「マレック（^{かきもり}鉤鉈）」しかなかったかのような記述をしている書物もあるが、実際には木の皮で作った網を用いて川や海での漁も行っていたことが、当時の文献資料より見て取れる。



また、シャクシャインの戦いが、和人に不当な搾取をされたため起こった戦いであるという認識も誤解が多い。この戦いは江戸幕府による鎖国政策と大きな関連がある。鎖国政策以前は、北海道は蝦夷地と和人地に分かれておらず、比較的自由に往来でき、従って交易も活発であった。しかし、鎖国政策により、蝦夷地と和人地が二分され、往来の自由度がなくなり、交易場所は松前城下限定された。これにより、本来交易の民であるアイヌの生活は圧迫され、シャクシャインの戦

いに発展したという見方ができる。

■田端 宏（道都大学）

「東蝦夷地の場所請負制とアイヌ」

蝦夷地は地域によって主要産物に違いがある。西蝦夷地は^{にしん}鱈や^{なまざけ}生鮭（アイヌが捕った魚を和人がその場で買った鮭の意）が主な産物である地域が多く、東蝦夷地ではカラザケ、クシガイ、ヒダラなどの干物などが主な産物であった。和人から見れば、鮭や鱈がたくさん捕れる西蝦夷地のほうが、東蝦夷地よりも交易が活発なため裕福に見えたが、アイヌの立場から言うと、東蝦夷地のアイヌのほうがアイヌらしさが残っているといえる。

東蝦夷地のアイヌには史上に有名な「ツキノエ」と「イコトイ」というアイヌの長がいる。彼らはともにウルップ島で^{さらさ}ロシアと交易をしていた。米と引き替えに、絹、更紗木綿、砂糖、薬種を手に入れていた。当時の幕府は鎖国体制をとっており、蝦夷地を管轄する松前藩はロシアとアイヌの交易を認めていないが、江戸幕府はアイヌにロシアの情報を探るよう命令しており、その立場を利用してアイヌはロシアとの交易をすることができた。和人との交易が盛んな故に和人化する傾向にある西蝦夷地のアイヌより、当時の日本とロシアという二つの国の間に存在した、交易の民としての東蝦夷地のアイヌのほうがアイヌらしさを残しているといえる。



本講演会では、普段あまり目にするもののない難解な近世の文献資料を、講師の方々に分かりやすく解説いただきました。

（学芸課 角 達之助）

講師 北川 アイ子氏

(資料館ジャッカ・ドフニ館長)

平成12年11月15日(水)13:00-14:30 当館講堂



11月15日には資料館ジャッカ・ドフニ館長の北川アイ子氏を講師に迎え『ウイльтаの手袋“マンバッカ”づくり』を開催しました。

サハリンの少数民族であるウイльтаの中には、戦後北海道や本州に移住してきた人もおり、北川氏もその一人です。

ウイльтаは、かつてはトナカイを飼育し、アザラシ狩猟や漁撈を行っている民族でした。そうした活動にふさわしい衣服を作ることは非常に重要なことで、手袋にもいくつかのタイプがあります。

ウイльта語でマンバッカとよばれる形の手袋は「ミトン」にあたる親指だけがわかれていたものをさします。このほか5本指のもの(ウイльта語でタルバシカ)や、当館が所蔵する手袋のなかには、3本指手袋もあります。

いくつか作り方があなかで、今回の講習会では3つのパーツを縫い合わせてつくるものにしました。また、実際の手袋はトナカイ皮が使われていますが、キルティングを材料にしました。

はじめに親指と、手のひらになる部分を縫い合わせます。次に甲の指先にあたる部分にひだをとり、それから先ほど縫いあわせた手のひらと親指の部分と甲の部分をぬいあわせてできあがりです。

講師の丁寧な指導に、参加者は熱心に針をすすめ、完成した手袋に満足の様子でした。

(学芸課 笹倉いる美)

弦楽四十奏による 青少年のための室内楽の夕べ

平成12年12月27日(水)18:00-19:30 当館講堂

ロビーコンサート(主催:(財)山田記念青少年育成財団、(財)北方文化振興協会、後援:北海道立北方民族博物館)は当館が開館してから毎年開催してきた事業です。毎回少しずつ演奏者の顔ぶれをかえてきましたが今回は初回と同じメンバーで、札幌交響楽団員のバイオリン・石原ゆかりさん、富樫耕さん、ヴィオラ・遠藤幸男さん、チェロ・川崎昌子さんによる弦楽四重奏をお楽しみいただきました。

没後250年のバッハのフーガ、モーツァルトの弦楽四重奏曲k.157等のクラシックや、星に願いを等のポップスを、わかりやすい解説つきで演奏していただきました。

また北海道網走養護学校高等部1年の江頭亜紀さん(独唱)と高等部2年の佐東宗春さん(ピアノ演奏)が特別出演しました。

年末のあわただしさの中、当博物館のロビーコンサートでひとときつくことを恒例とされている方たちも多くいるようです。



独唱 江頭 亜紀 さん



ピアノ演奏 佐東 宗春 さん

今号の表紙—擦文土器—

オホーツク文化がオホーツク海沿岸地域や一部日本海にのみ展開していた8世紀頃、北海道全域および東北地方の一部には擦文文化が展開していた。北海道の先史時代のうち、擦文土器を使った時代・文化を「擦文時代・擦文文化」という。

擦文文化以前の縄文文化後期（紀元7世紀頃）、本州では奈良時代後期にあたる頃、それまで本州で製作・使用されてきた土師器とよばれる土器が北海道西南部に上陸した。この影響もあって、何千年も続いた「縄文伝統」が失われ、土器の全面を木のへらで横方向、縦方向、斜め方向にこすった跡がみられる擦文土器が登場することになるのである。

また、擦文土器の器形には深鉢形、浅鉢形、高環形、環形などがあり、表紙の土器は深鉢形にあたる。

みんぞく こうこ はくぶつかん
in 北海道

このコーナーでは、当館の活動に関連する分野の新聞記事のうち、道外ではあまり紹介されていない情報を掲載します。

- 10/15（日）国の重要文化財に指定されている道内最古の民家「旧笹浪家住宅」の修復工事現場が特別公開、上ノ国町/Y
- 10/27（金）姉妹都市20周年の一環として、苫小牧市のアイヌ民族とニュージーランド・ネーピア市のマオリ族が交流/D
- 11/20（月）札幌、帯広、東京に住むアイヌ民族の若者15人が「アイヌ・アート・プロジェクト」を結成/D
- 12/1（金）南東アラスカの先住民、クリンギット族の古老らが「神話を語る会」を開催、札幌市/M
- 12/18（月）北海道埋蔵文化財センターが平成12年度に道内で発掘した出土品を紹介する「赤彩土器と蔵手刀展」を開催、江別市/M

※D：北海道新聞 M：毎日新聞 Y：読売新聞
複数紙掲載の場合は抜い大きい方を紹介しています。

開館10周年記念企画展
グレートジャーニー

～北を目指した人類の子孫たち～
南米、中米、北米、北東シベリアそしてモンゴル

人類の足跡をたどって南米最南端からアフリカをめざして旅を続けている探検家・関野吉晴氏の写真によって人と自然を紹介します。

開催期間：2001.1.10(水)～3.25(日)

協力：関野 吉晴氏

休館日：月曜日、2.15(木)、

3.13(火)

観覧料：無料



■寄贈資料紹介

- 札幌市の谷本一之氏からコリヤークのお守り二体一組が寄贈されました。
- ロシア・カムチャッカ州のハン・イノケンティエブナ氏から編みかご、壁かけ、財布各1点が寄贈されました。
- 札幌市の池上二良氏から北海道アイヌのござ1点が寄贈されました。
- 札幌市の納谷大宝氏から北海道アイヌほかの絵葉書20点、写真2点が寄贈されました。
- ロシア・カムチャッカ州のハライモヴァ・クラウディア・ニコライエヴナ氏からイテリメンに関する書籍ほか8冊が寄贈されました。

■執筆から贈呈を受けた書籍等

- ・ K.H.Халоймова
1989 Ительменско-Русский Словарь
1997 Ительменский язык
1998 Мэм-Мэмчэх Амнээ
1999 Букварь
- ・ С.В.Березницки 1999
Мифология и Верования
Орочей
- ・ А.Ф.Старцев 2000
История Социально-Экономического
Культурного Развития
Удэгейцев

■主な来館者

11/5(日)

スウェーデン国立民族学博物館
学芸員

Håkan Wahlquist

11/22(水) 国立歴史民俗博物館

教授 西本 豊弘氏

慶応義塾大学

講師 佐藤 孝雄氏

11/25(土) 立教大学

教授 山浦 清氏

■行事案内 (1月～3月)

2/10(土) 開館10周年記念講座

「アラスカの先史文化」

2/17(土) 講座

「北東アジアの人類史と先住民文化について」

①「映像に見る北方先住民の資源利用」

②「北方の人類史」

3/10(土) 博物館クラブ

「かんじきで歩こう」

■観覧者動向

(10月～12月)

	常設展示
10月	2,236
11月	820
12月	419
計	3,475名

■その他の行事報告

11/11(土) 博物館クラブ

「イヌイト・ヨーヨーをつくろう」



12/9(土) 博物館クラブ

「火おこし」



■友の会会員募集中

北方民族博物館友の会会員を募集中です。友の会では季刊誌「Arctic Circle」や「友の会だより」をととして北の文化を紹介しています。年会費は3000円です。すでに会員になられた方は、お知らせの方にもご紹介ください。詳しくはお問い合わせを。

■編集後記

いよいよ21世紀です。また、北方民族博物館にとっては、開館10周年の記念の年です。

現在、北方民族博物館では常設展示室内の検索ボックスの更新、収蔵資料のデジタル化を行っています。3月末日完成予定です。ご期待下さい。

今後とも北方民族博物館をよろしくお願い申し上げます。(角)